

令和六年 卯月 759号

よつぎ

目次

主基地方風俗舞

第六十二回若布献上

辺津宮末社本殿遷座祭

みどころ

神宝館だより

宗像大社歌会詠草

御造営奉賛者御芳名

7 7 6 5 5 4 3・2

よつぎ 近年AI（人工知能）

の発展が目覚ましい。コンピュータの黎明期から開発研究が進められていたが、社会が期待する水準に到達する平成二十六年頃までは冬の時代が続いていたが、ディープラーニングと強化学習を導入したAIが囲碁、ポーカーのトッププレイヤーを破るなど華々しい成果により最先端技術として注目された▼この時の主な革命は、自然言語処理、センサーによる画像処理など視覚的側面が特に顕著であり、社会に大きな影響を与えた。そして数年後には生成AIである「ChatGPT」が公開され、質問に対する柔軟な回答が注目を集めた▼しかし、AIが著作物を学習する事による権利の侵害や、著名人や企業のなりすまし「ディープフェイク」による社会的な混乱等の負の側面も出てきている▼責任は使われる道具ではなく使う人間にある。我が国は古代から様々な思想や技術を受け入れてきているが見慣れない新しい技術が混乱の元になることもある。否定するのではなく社会の発展に寄与するように受け入れていきたい。

(目)



宗像大社春季大祭 —主基地方風俗舞—



御下賜され、宗像大社で初めて
舞われた風俗舞 昭和4年4月14日

当社では、春秋の大祭に際し神前に保存会の奉仕により、「主基地方風俗舞」が奉納されている。風俗舞は宗像大社の古来よりの舞では無く、天皇陛下の御代替わりに齋行される大嘗祭において、亀卜にて選定し京都を中心として西方の国を「主基地方」、東方の国を「悠紀地方」とし、それぞれに齋田が指定される。この齋田地方の風俗歌を基に、作曲・作

舞され大嘗祭・大饗宴の際のみに披露される国風舞をそれぞれ「主基地方風俗舞」「悠紀地方風俗舞」と称し、門外不出を原則として、終えたる後は一度たりとも奏される事なく、昭和以前の国風舞は全てが消滅している。昭和三年、昭和天皇の御即位の大礼に際し、福岡県早良郡脇山村（現 福岡市早良区大字脇山）が主基地方に選ばれ脇山村の産土神で

ある横山神社にて成就祈願祭が齋行された。横山神社が宗像大社の分社であった関係上、京都御所への新穀献上当日、関係者らが宗像大社へ御礼参りを行っている。

当時の斎藤県知事は主基地方勅定の名譽を後世に伝えるため、毎年四月十四日を「主基地方勅定記念日」と定め、奉祝行事を盛大に行うべく、宗像大社が祝典の会場に指定され、諸準備が進められた。これに先立ち、大嘗祭と大饗宴にて陛下の御前で奏された主基地方風俗舞を勅定記念行事の「魂」とすべく各関係者は宮中に赴き、主基地方風俗舞の御下賜の請願書を提出した。宮中では、前例のない請願に対して大いに困惑されたが、特別の思召しを以って下附する裁定を下した。

毎年行なわれていたこの奉祝行事も昭和

十二年の日華事変の勃発により、中断の憂き目にあつた。しかし、同二十七年には「主基地方風俗舞」を復興すべく協議会が設けられ、復興の組織が編成された。昭和三十年の秋の大祭には十八年ぶりに「主基地方風俗舞」が神前に蘇つた。昭和五十三年に現在の「主基地方風俗舞保存会」が結成され、昭和五十六年には沖津宮の神前に風俗舞を奉納し、念願の宗像大社三宮の現地奉納が叶つた。

復興後は、毎年春秋の大祭には欠く事の出ない奉納神事として、大きな役割を果たしている。会員一同は由緒ある舞樂の継承者として、日々研鑽に励んでいる。

第六十二回若布献上

早春の玄界灘天然若布を皇室へ献上

昭和三十八年から始まる若布献上は今年で六十二回目を迎える。

皇室に献上する若布は宗像市地島で採取される。特に献上用はワカメ漁の解禁前に新芽の部分を刈り取り奉製されている。その後伝統的な技法を用いて特別に奉製された乾燥若布が神社に納められ、献上へ向けて準備が進められる。

「若布献上の儀」は四月十一日(木)に賢所、天皇皇后両陛下、上皇上皇后両陛下、秋篠宮皇嗣同妃両殿下、三笠宮家、高円宮家、常陸宮家、寛仁親王妃信子殿下へ献上し上げる。

近年、若布献上の日程は四月に献上することが多くなっているが、二月下旬や三月の中旬から下旬にかけて献上していた時期もある。これは若布の生育状況によって変動している。最近では、海水温度が上昇し、寒期に成長する若布にとって大きな影響を及ぼしている。

海の環境悪化は人間の生活にも影響を与えるが、海の鎮守の森を持つ我々の神事にも大きな影響を与えている。

地島のワカメ

ワカメ漁は毎年、三月～五月頃まで行われ、今年も三月一日に解禁となった。玄界灘と響灘の潮がぶつかり合う地島の海は肉厚で良好なワカメが育つ。波や、風が強い日には漁がでさず凧の日を待つて漁を行う。刈り取られた若布は選別、湯通し、茎取り、塩蔵などの工程を経て、塩ワカメとなる。「地島天然わかめ」としてブランド化に取り組んでおり、漁解禁後二週間以内に採れた「初採れわかめ」を厳選し販売している。是非一度、お試しください。





平成ノ大造営

辺津宮末社本殿遷座祭

三月一日、昨年六月一日より修復工事のため、仮宮にお遷ししていた①宇生神社(指来神社 合祀)、②政所神社(朝拝神社、風隼神社、息送神社、九日神社、息正三位神社、矢房神社、風降天神社、大都加神社 合祀)、③百大神社、④二柱神社の本殿遷座祭が斎行された。

当日、午後七時四十五分、工事関係者ら参列のもと、本殿遷座祭を斎行。浄暗のなか厳肅に遷御の儀は奉仕され、仮宮より四社の御神霊は一度宇生神社に入御された。祭典を終えた後、四社の御神霊は其々の御社に奉安された。

翌日の二日午前十時には其々の御社で御饌祭を斎行し、滞りなく今年度の末社本殿遷座祭を執り修めた。令和六年度は藤宮神社、稲庭上神社、妙見神社、千得下府神社の修復を

予定している。

辺津宮末社正遷座祭 式次第

- 当日早旦社殿を裝飾す
- 次に、齋主以下祭員列立
- 次に、齋主以下祭員参進
- 次に、齋主以下祭員祭場所定の座に著く
- 次に、修祓
- 次に、齋主一拝(諸員之に倣ふ)
- 次に、齋主祝詞を奏す(此の間 諸員警折)
- 次に、遷御(此の間警躍)
- これより 宇生神社
- 次に、入御(此の間警躍)
- 次に、齋主祝詞を奏す(此の間 諸員警折)
- 次に、齋主拝礼(祭員列拝)
- 次に、参列者代拝礼
- 次に、齋主一拝(諸員之に倣ふ)
- 次に、各退出



左より宇生神社、政所神社、百大神社、二柱神社

みこころ

冬の寒さが終わり、だんだんと春らしい季節

になって来ました▼当社では、四月一日と二日に春季大祭が行われますが、大島の中津宮では、旧暦の三月十五日である四月二十三日に行われます。そこで私は浦安舞を奉納させていただきます▼初めて奉納させていただいた時は、とても緊張して周りを見ることができなかつたのですが、今回は二回目となるので、昔と先輩の動きに合わせながら前回とは違った成長した舞を奉納できると思います▼私は、奉職して一年が経ちました。最初は分からないことが沢山ありましたが、先輩方の丁寧な指導のおかげで様々な知識を得ることができました。巫女でしか出来ないことも経験させていただきました。祈願を参拝者として受ける側だったのが、巫女として鈴祓いなど祈願の補佐や、授与所での応対も行っていくなかで少しは成長できたと思います▼この経験をもとに、四月からできた後輩たちのお手本となれるような先輩らしい姿をみせていきたいです。

(樋)

神宝館だより 84

八万点ノ国宝収蔵

能登半島視察記⑥

八月十一日朝、筆者ら一行は定期船「望海」に乗り舢倉島へ出発した。輪島港から北に約二十kmに七ツ島という無人の群島があり、さらに北へ約二十八kmに舢倉島がある。

『万葉集』には、七四九年に、越中守だった大伴家持が、能登巡行の折に京にいる妻を偲んで詠んだ歌として「珠洲の海人の沖つ御神にい渡りて潜き取るといふ鮑玉」という長歌と「沖つ島い行き渡りて潜くちふ鮑玉もが包みて遣らむ」という短歌がある。この「沖つ御神」は「オクツヒメノカミ」、「沖つ島」は「舢倉島」を指すといわれる。宗像の鐘崎の海女が渡ってくる十六世紀中葉以前、輪島市中心部の北東にある名舟の集落の人々が主に舢倉島へ渡っていた事実を示す史料が多く残るが、八世紀中葉には、能登半島先端部の珠洲の人々が渡り潜水漁業をしていた可能性が高い

という。十二世紀前半に編纂された『古今和歌集』に残る説話には、舢倉島が「猫の島」、七ツ島が「鬼寝屋島」と表現されており、舢倉島や七ツ島の呼称の成立は十二世紀以降の中世と推定されている。

舢倉島からは弥生時代中期から中世にかけての遺物も見つかっており、断続的に人が渡っていたことが確認されている。七ツ島のうち大島からは、平安前期や近世の須恵器が見つかっており、上記の説話を裏づけている。同島には井戸があり真水も手に入ったという。

我々を乗せた船は七島が群がる七ツ島を左手に横切り、舢倉島へ向かった。標高十二mしかない舢倉島は平べったいため、船からの視認が難しい。沖ノ島遠望の印象とは全く異なるものだった。島に到着すると、島民が乗船し出港の用意ができるまでの十分程度、船外に出ることを許された。一行はまず灯台を目指し、それぞれ島内を駆け巡った。筆者の最大の目的は、島の西端にあつて宗像の神を祀る奥津比咩神社の視察だったが叶わず、時間の許す限り周囲の様子を眺めて船へ戻った。

帰りの船は、元海女らしき方々など島民が加わり賑やかだった。お盆にはみな本土の海士町（鐘崎海女の集落）に帰るそうだ。途中、豪雨の影響で流れてきた流木が楫に挟まり数十分漂流する羽目になったが事なきを得て輪島に帰港した。

（福）

※参考資料…神宝館だより④ 大高前掲書
神宝館だより⑤ 楠本、小嶋 前掲書



七ツ島(真ん中が大島)



まずは灯台へ急ぎ向かう一行。



舢倉島入港。島一面が平たい

第752回

宗像大社歌会詠草

■大西晶子選 ■毎月25日メ切(順不同)

雲に乗りまだ見ぬ世界夢みてたあのガラス窓際の日溜り

早川 祥三

雲に乗った気分でまだ見ぬ世界を夢見たというロマンティックな歌。四・五句の句まがりは読みにくいのでガラスを除けて「あの窓際の春の日溜り」としては。

桜咲く恩師を偲び三回忌丘を登りて長崎宿へ

秋吉 嘉範

初句切れの歌。長崎で学んだ作者だろうか、恩師の三回忌は桜咲く頃だったのだから。三句は字余りになるが「三回忌」と助詞をつけたい。

五歳児ら道着に帯しめ背すじを伸ばす胸には禅の漢字が黒い

萩原 勉

先月に続く五歳児の空手練習風景。三句以降を「背を伸ばす胸には黒き「禅」の字つけて」とすると子供達の姿がよく分かる。

おひるまえおーいとなにかが我を呼ぶ七草の日の村社への道

山崎 公俊

村社への道で作者を呼ぶのは人ではない何かなのだろうか。七草の日のお屋前というところ寒く人気がない景色が浮かぶが、狐狸かもしれないと読んだ。

黒髪に紅い口紅久子ちゃん縁者捜して空かけ巡る

本田エリナ

作者は叔母久子さんのお墓の場所を知りたく縁者をさがしているとのこと。歌の中では久子さんが探す人になっている。二句「口紅」四句「縁者を捜し」と助詞を。

五年後でもまだ十歳の子を残し逝くことはできぬ寝顔にちかう

堺 玲子

癌の治療を受けた作者。幼い子を残し逝くことを想像するだけでも辛かっただろう。結句を「生きるとちかう」としてはどうだろう。

ランドセルひびぎにドリルする女の子車窓の外は走り去るビル

東 雅子

乗り物の中で見た光景だろう、今は子供たちもお稽古ごとや塾などで忙しいのだ。上の句・下の句の関連を強める様に、四句以降「ありて車窓をビル走り過ぐ」に。

東京は大雪となりチャンネルをかへても雪雪いづくも雪なり

佐々木和彦

東京で雪が降るとニュースになるが、この日は余程雪が多かったのだろう。東京の雪にニュースが占領されているのを雪の繰り返しで表しているのが面白い。

出揃いし麦の緑が一月の日に広がれり能登は寒かる

吉崎美沙子

九州では一月には畑に麦の鮮やかな緑色が広がるが寒い。作者はそこから地震で被害に遭った能登の人達を思いやったのだ。結句の「寒かる」のひびぎが優しい。

◆選者詠

いにしへのうたびとなればなんと詠む雪積もること咲くヒトツバタゴをこもりつつ老々介護の日々つづくわが家を吹きぬく花の香のかけ

第722回

俳句

ハゼの実にしつと梅檀の黄実さわぐ

早川 祥三

御造宮奉賛者御芳名

(令和六年二月)
(順不同・敬称略)

一〇、〇〇〇円

阪南市 山中富士夫

品川区 小林 朋子

五、〇〇〇円

練馬区 UCHIDA商店

糟屋郡 中野 慶司

糟屋郡 中野小百合

市川市 根本 輝尚

広島市 河野 明称

広島市 河野 忠敏

知立市 加藤 久和

三、〇〇〇円

邑楽郡 森田 玲子

目黒区 木村 理子

練馬区 数野 ユミ

長崎市 橋本律雄・彼路子・典樹

下関市 藤井 智信

市川市 根本 雅恵

北九州市 中野 亮子

須賀川市 金子かつ子

福岡市 四宮 多恵

4月まつりごよみ

1日	春季大祭	午前11時
2日	高宮祭、第二宮第三宮 宗像護国神社春季大祭 春季総社祭	午前10時 午前11時
15日	総社月次祭 引続き 高宮祭、第二宮第三宮祭	午前11時
23日	沖津宮春季大祭 (沖津宮遙拝所) 中津宮春季大祭 (中津宮)	午前9時 午前11時
29日	昭和祭	午前11時

編集後記

三月中旬、「九州地区中堅

神職研修」を受講してきた。これは神
界の中堅となるべき神職の教養を培うと
ともに特に神社庁の運営の基礎能力を養
うことが目的とされている。講義内容は
祭祀演習や神道教化に関することなど多
岐にわたる▼この「中堅」という言葉の
捉え方であるが、奉仕神社や地域の「中核」
とも捉えることができる。しかし研修中は
自身の未熟さを感じるばかりであった▼
四月より郷里での奉仕がいよいよ始まる。
十年間宗像で学んだことも含めて、斯界
をはじめ地域の中核を担えるような神職
となれるよう新天地での日々の奉仕のな
かにも研鑽を積んでいきたい。(黒)